# 伊平屋島内のグスクに見られる石積みの形態と構造について
## －田名グスクを中心に－

山　本　正　昭

About a form and the structure of piling stone seen in a castle of  Iheya Island

Masaaki  YAMAMOTO

伊是名島・伊平屋島総合調査報告書、沖縄県立博物館・美術館　別刷

2019年３月15日

Reprinted from Survey Reports on Natural History, History and Culture of
Izenajima and Iheyajima Islands, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

March, 2019

伊是名島・伊平屋島総合調査報告書、沖縄県立博物館・美術館（*Survey Reports on Natural History, History and Culture of Izenajima and Iheyajima Islands,* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum）: 95-102（2019）

# 伊平屋島内のグスクに見られる石積みの形態と構造について
## －田名グスクを中心に－

山　本　正　昭※

# About a form and the structure of piling stone seen in a castle of Iheya Island

Masaaki YAMAMOTO

## はじめに

伊平屋島にはグスク時代まで遡る遺跡は６ヶ所、確認することができ、うちグスクの名称が附される遺跡が当該島内に３カ所、見ることができる（註1）。田名グスク（註2）は集落背後にある標高180mの後山頂上部に所在し、賀陽山のグスク山は集落からかなり距離を置いた標高300m近くの頂上一帯、ヤヘーグスクは沿岸部の岩礁上といったようにそれぞれが特徴的な立地となっている。伊平屋島では石材が豊富に産出されることから、これらのグスクには石積みが使われており、全て一定空間を囲繞するといった共通性が窺われる。石積みの規模は幅が１～３m、残存高は概ね0.5～2.5mとそれほど規模は大きくないと言える。過去にグスク踏査や遺跡分布調査によって、伊平屋島におけるグスクの実態がかなり明らかとなってきているが、未だに伊平屋島におけるグスクの特性について議論の余地があるように思える。

本報告では当該地域における石積みを有するグスクの特性をさらに明確に洗い出すために、伊平屋島内で最も規模が大きくかつ、残存状況が良好な石積みを有するグスク（註3）である田名グスクを取り上げ、当該島におけるグスクに見られる石積みの実態についてスポットを当てていくものである。と同時に、伊平屋島におけるグスク時代の一側面について粗描していきたい。

## 1. 田名グスクに見る縄張り

田名集落の北側にある独立丘陵の後山の頂上部に当グスクは立地している（写真１）。現在のグスクへの進入するには丘陵麓にある田名神社の背後から頂上部へと続く登坂路がある（写真２）。この登坂路の傾斜はかなり急であるがこれは沖縄戦後、田名神社周辺に米軍が駐屯した際に重機で丘陵裾あたりを切り崩したことに因るものである（註4）。

標高40mあたりから登坂路の東側に隣接して小平場が10カ所以上取り付いているのが確認できる。それらは全て登坂路沿いに配置されており、南北方向に展開していることから、登坂路を進む寄せ手に対して横矢を掛ける配置となっている。標高50mあたりまで登坂路を進むと左右をチャートの石材を粗割した石材で組まれた出入口①にあたる（写真３）。出入口の幅は約２mで奥行は３m、石積みの高さは最高部で約1.5m残っている。この出入口から更に上部の出入り口までは斜面が続き、ひな壇状に平場が3カ所配置されている。

出入口の西側は急傾斜となり、とくに石積みは配置されていない。また、出入口の東側は石積み②の高さが2.5mほどで（写真４）、その上部から登坂路だけではなく田名集落とその東側に広がる水田を眼下に見ることができる。おそらく物見としての機能を有していたと思われる。更にそこから東側には南北方向に延びる石積み③が斜面に沿って配置されている（写真５）。この石積みの東側は急斜面とな

※沖縄県立博物館・美術館　〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1

写真１　後山全景（南から）

写真５　東側縁辺の石積み

写真２　田名グスクへの登坂路

写真６　城嶽御イベ

写真３　出入口

写真７　頂上部近くの出入口

写真4-1　出入口脇の石積み

写真８　頂上部出入口脇の石積み

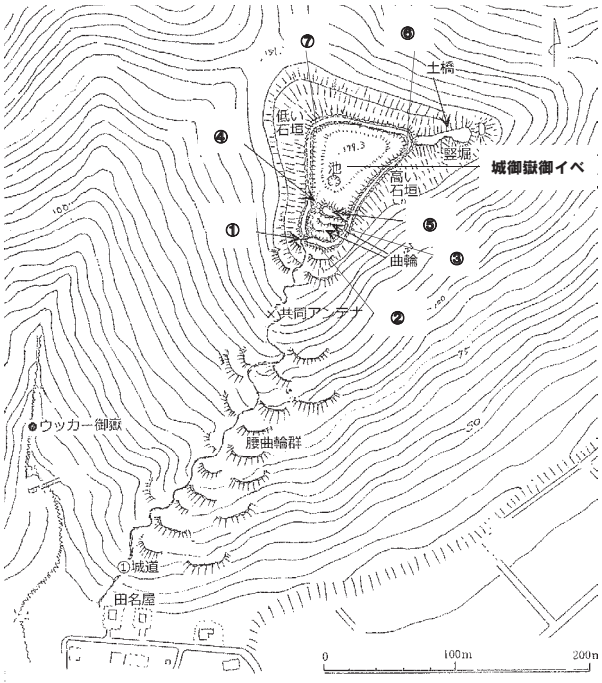



図１　田名グスク縄張り図（當眞2012に一部加筆）

るが西側の急斜面ほど勾配が強くないため、東側斜面から侵入する寄せ手に対する障壁の機能をこの石積み有していると考えられる。同時に、先の出入口から上方の出入り口まで誘導させるための仕切りとしての機能も考えられる。

頂上部を東西52m×南北約80mの範囲で囲繞する石積みは高さ１～1.5mほど残存している。この内部は井戸と思われる窪みが北東部にあり、その近くには「城嶽御イベ」(註５)とされる御嶽が所在している（写真６）。平場は見られるものの、石積みまでは高低差を有しており、囲繞している範囲の約半分の面積約2,000㎡しか平場は占めていない。この石積み囲いの南側に登坂路として使われている出入口④が見られる（写真７）。その東側は下方の出入口と同様に高い石積み⑤が配置されており、やはり南側にかけての眺望が利く場所となっている（写真８）。また、下方に向けて大量の石材が散乱していることから、この南西側、つまり外側に向けてかなり高く石積みが立ち上げられていたと思われ、寄せ手に対してある程度の威圧を与える効果があったものと想定される。この石積み囲いにはもう1か所、高い石積み⑥が配置される箇所が北東隅にある（写真9）。この石積みの南西側の斜面、つまり外面側に多くの石材が散乱していることから、かなり高く外側に向けて積まれていたものと思われる。この石積み⑥を基点にして北東方向に小尾根が続いていることから、先述した出入口とは別の進入路が考えられる。それを裏付けるように、北東へ更に30m程の位置に竪堀状の筋や平場、土塁状の高まりがまとまって配置されている。これらを組み合わせることで複雑に進入路を屈曲させているようにも見ることができる。上記の遺構が見られる箇所は北東－南西方向に延びる丘陵尾根の最頂部になり、この尾根線ラインは麓まで続いている。さらにその延長線上には小さな湾があり、そこは田名の泊とされている場所となっている（写真10）。現在の登坂路とは異なる登坂路としてこの尾根線ラインが想定され、それに対応する形での防御施設を重点的に配置していたものと考えることができる。因みにこの石積み囲いの北西方向にも丘陵尾根延びているが、そこに接する石積み⑦（写真11）は他の石積みとは規模が大きく変わらないのは、西北方向の尾根線ラインの延長線上は山岳地帯であることから、寄せ手の進入路としてあまり想定していなかったことに因るものであると考えられる。

当グスクは斜面部並びに尾根線ラインに対する防御を石積みや平場などを組み合わせて巧みに配置させていることから、琉球列島のグスクの中でも地形を最大限に利用した、特異なグスクであると位置付けることができる。なお、発掘調査は過去において実施されていないが、頂上部付近においてカムィヤキや中国産青磁が表採されている(註6)。

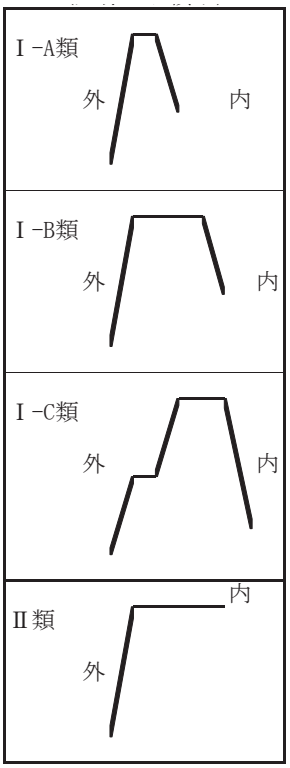
## ２．田名グスクの石積みの形態

田名グスクに見られる石積みはグスク外からの進入を防ぐために構築されたものであるが、その断面形態については以下のように2つに大別することができる。

Ⅰ類：内外面共の面を有する。

Ⅱ類：外面のみ面を有する。

Ⅰ類においては外面が高く内面が低くなっており、土留めとしての機能と共に障壁としての機能を備えている。Ⅱ類においては障壁としてよりも土留めとしての機能が考えることができる。前者については上端部が１m前後と狭小になるⅠ-A類、上端部が２mを越えるⅠ-B類、上端部が２mを越え、




別表　石積み断面形態分類表（太線は石積み）

且つ外面下部に段を有するⅠ-C類とに細分することができる。別表はこれらを模式的に図示しまとめたものであるが、この分類は当グスクでは石積みの崩落が著しい箇所も見られるたためため、現状における地表面観察での分類であるという限界性を有していることを先にことわっておく。

各箇所の石積み断面形態については図１の縄張り図で振った丸数字の箇所に沿って先の分類に当て嵌めていき、その機能について検証していきたい。

まず、出入口①ならびにその脇の②は石積み上端が２m強あることからⅠ-B類に比定できる。出入口が攻防の場となることから城壁上に人を配置させ、寄せ手に対して上方から攻撃を加えるといった足場としての役割を垣間見ることができる。また、②は眺望が利くことから、この石積み上は物見としての機能を担っていたと思われる。

石積み③はⅠ-A類に相当する。前章で触れたように先の出入口から上方の出入り口まで誘導させるための仕切りとしての機能が想定され、とくに石積み上における機能は求められていないと考えることができる。出入口④の西側斜面には急斜面が続いていることからほとんど石積みは見られない。一部、石材が散乱している部分においてはⅡ類に相当する

写真９　北東隅の石積み

写真10　田名グスクから望む田名の泊

写真11　北西隅の石積み

写真12　南東側の石積み

ものと思われる。

石積み⑤は石積み②と同様に眺望が利く場所で、石積み上端の幅は約３ｍを測り、その外側に石材が散乱し、更に土留め状の石積みが見られる。これらのことからⅠ-C類に比定される。物見としての役割と出入口脇であることから、攻防の拠点と成り得る。よって守備側の足場としての機能を担っていたものと考えられる。

石積み⑥はその上端幅が約2.5ｍを測ることからⅠ-B類に相当する。この石積み⑥の外側は北東－南西方向に延びる丘陵尾根が続き進入路と成り得ることにより、この箇所が攻防の拠点になることを見据えた守備側の足場としての機能が考えられる。加えて、北東側は高く積まれていた可能性を前章で指摘したことから、寄せ手に対して威圧を与える役割も果たしていたと考えられる。

石積み⑤と石積み⑥を結ぶ石積み（写真12）は比較的良好に残存しており、その形態はⅠ-A類に比定される。石積みの外側は急傾斜になるものの、登坂が可能であることから、障壁としての役割をこの石積みは担っていると言える。また、石積み⑥と石積み⑦の間の石積みも一部でⅠ-A類に比定される石積みが確認できる。

石積み⑦は石積み⑥に比べて内面は高さ0.3ｍとあまり高く立ち上げられていない。Ⅰ-B類に比定することができるが、土留めとしての役割が大きかったものと思われる。この石積み⑦から南へ延びる石積みについてはⅡ類に比定できる。その東側は登坂が困難な急斜面になることから、自然地形をそのまま活かした防御ラインを設定している。よって土留め程度の石積みとしているものと想定される。

これら田名グスクに見られる石積みの形態とその位置関係についてまとめると、進入路ならびに進入路と成り得る箇所においてはⅠ-B類、Ⅰ-C類が見られ、登坂可能な斜面部にはⅠ-A類が、登坂が困難な斜面部においてはⅡ類あるいは石積みを配置しないといった特徴が洗い出されてくる。この点を踏まえながら次章では当グスクの石積み配置から見たその意味について触れていきたい。

写真13　最頂部の平場

写真14　表採遺物（左：中国産青磁、右：カムィヤキ）

## ３．賀陽グスク、ヤヘーグスクと比較して

### ―まとめにかえて―

田名グスクの最頂部には当グスクの中で最も広い平場（写真13）が見られ、御嶽であると「城嶽御イベ」その隣に窪みがある。周辺では過去にカムィヤキや中国産青磁が表採されており（写真14）、13～15世紀前半の時期にはこの平場が生活の場として機能していたことが指摘される。具体的な状況に関しては今後の発掘調査によるところが大きいが、地表面観察ではこの平場の縁辺部には石積みは配置されず、平場から２～３ｍ低い位置に石積みが配置されていることが確認できる。これが意味するところはⅠ-B類、Ⅰ-C類の石積みが見られる南東部と東端が尾根の基点となることから、石積みは守備の足場となる箇所に優先的に配置し、その間はⅠ-A類、Ⅱ類のような石積みで連結させていくといった石積みの配置を読み取ることができる。守備の足場となる箇所においては強固な石積みを配置させ、それらを繋ぐ石積みは、地形的に防御性が高い

部分に対して土留め程度の石積み、低い部分においては障壁の役割を担う石積みで全体を仕上げていったものと看取される。また、平場と防御的に有利となる地点がかみ合っていないことから、このような高低差が生じたと解することができる。

伊平屋島の石積みグスクの中で最も残存状況が良好な田名グスクのみを今回、詳しく取り上げてみたが、当該島に所在する他のグスクである賀陽山のグスク山とヤヘーグスクが石積みを有したグスクであることから、それらの比較を少し行っていきたい[註7]。

写真15　賀陽グスク石積み

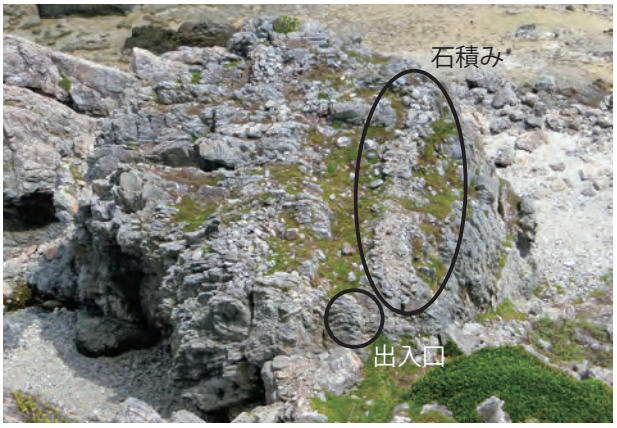



写真16　ヤヘーグスク平面（東から）

写真17　田名グスク出入口近くの石積み

賀陽山の頂上に立地するグスク山、ここでは便宜的に賀陽グスクとするがこのグスクに見られる石積みの断面形態は出入口付近においてはⅠ-B類、Ⅰ-C類であり、地形的に防御性が期待できる箇所においてはⅡ類、防御性が低いと思われる箇所においてはⅠ-A類としていることが確認できる（写真15）。このことは田名グスクと共通した石積みに対する考え方があると共に、石積みに囲繞された内部空間に関して平場は見られるものの、高低差を持って複数ヶ所配置されていることも田名グスクとある程度の共通性を有すると言える。

一方で沿岸部に所在するヤヘー岩麓に立地しているヤヘーグスクを見ると、岩塊上の狭小な平場縁辺部を囲繞するように石積みが配置されている（写真16）。面積は1,000㎡以下と小規模で石積みも出入口付近はⅠ-A類でその箇所以外ではⅡ類となっている（写真17）。内部の平場はかなり狭小で岩盤が露頭していることから長期的な居住はかなり厳しく、非常時には避難場所としての機能も考えられている（當眞1995）。出入口周辺のみ障壁機能を持たせた石積みを配置させたのみであることから防御性は決して高いとは言えないものの、守備の要点を意識した全体プランになっていると言える。

このようにそれぞれが異なる立地と規模となる伊平屋島内に所在する３カ所のグスクであるが、出入口や進入路となるような箇所において守備の足場となるようなⅠ-B類、Ⅰ-C類が石積みとして採用されていることや、小規模な石積みグスクについては足場ではなく障壁として機能するⅠ-A類が出入口周辺に採用されているといったことから、かなり自然地形に依拠した縄張りになっていると評価することができる。

今後、伊平屋村内で石積みを有した遺跡が新たに確認された際に上記による視点でその防御性が読み取れるかどうかで、石積みグスクの範疇に入るかの判断は一定程度有効であると思われる（註8）。そして、今後において更なる調査で今回取り上げた石積みグスクの実態が明らかになってことを期待したい。

**【註釈】**

（註１）伊平屋村の遺跡分布調査ではグスク時代まで遡る遺跡は５遺跡が報告されており（伊平屋村教育委員会2000）、近年、賀陽山頂上のグスク山からもグスク時代まで遡る遺物が表採されているため、６遺跡とした。

（註２）田名グスクには「ウッカーグスク」という別称がある。本報告では田名グスクの名称で取り扱うことにする。

（註３）以下、石積みグスクとする。

（註４）伊平屋村教育委員会の嘉手納智子氏のご教示による。

（註５）神名は「コシアテ森」とされている（伊平屋村字田名区2003）。

（註６）当該グスクに係る文献史料は皆無である。伝承では中国からの戦に備えるために日本本土の人が築いたとあり、完成を見ずに伊是名島に渡り伊是名グスクを築いたとされている（遠藤2001）。

（註７）沖縄本島での伊平屋島と同緯度に相当する国頭村では石積みグスクは皆無である。一方で伊平屋島とほぼ同緯度に相当する鹿児島県大島郡の与論島では大規模な石積みグスクを見ることができる（山本2015）。

（註８）腰岳の頂上付近にも石積みが散見されている（伊平屋村教育委員会2015）が今回の踏査では遺物を採集することができなかった。そのため、本報告では取り扱わなかったが、今後において詳細な調査が待たれるところである。

**【参考文献】**

沖縄県教育委員会1985「沖縄グスク分布調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書』第53集

名嘉正八郎1995「グスク（城）の姿」『日本文化研究所叢書』鹿児島短期大学附属南日本文化研究所

當眞嗣一1995「離島の小規模グスクについて」『沖縄県立博物館紀要』第21号　沖縄県立博物館

遠藤庄治編2001『伊平屋村民話集』伊平屋村教育委員会

伊平屋村字田名区2003『伊平屋村田名字史』

當眞嗣一2010「太郎と和夫の田名グスク（伊平屋島）探検」『南島考古』第29号　沖縄考古学会

伊平屋村教育委員会2000「伊平屋村の遺跡―村内遺跡詳細分布調査報告書―」『伊平屋村文化財調査報告書』第3集

山本正昭2015「与論グスク概観」『しまたてぃ』№73　一般社団法人沖縄しまたて協会

伊平屋村教育委員会2015『伊平屋島・野甫島文化財悉皆調査報告書』